

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第25号 1994, 5, 7

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060 札幌市中央区南2東2
河合楽器製作所北海道支社内
電話 011-231-8661
FAX 011-221-4936

運営委員会の報告

本年一月三十日(日)午後5時から本年度第一回目の運営委員会が委員十七名出席して開催された。運営委員会に引き続いて次に述べる会が開かれたこともあって、一般委員五名が委員会に同席された。それ以来かなり日時が経過したが、その運営委員会で検討されたことをかいつまんで報告する。

＊

＊

一、ポーランドの児童画作品二〇八点が届いているので、これの展示会を開催することが決まった。展示会を具体化するためのアイデア提供やご助力いただける会員を募っています。この取りまとめは国田裕作運営委員(電話814-7214)が中心になっで行われることになりました。できれば展示会を六月頃に講演会や料理講習会のような他の企画とともに「ポーランド週間」行事の一環として開催したいのですが、同時に開催する行事の適当な企画の提案がありませんか。あれば是非ともお申し出ください。

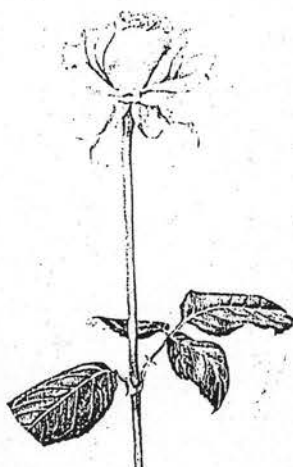
二、数年来の懸案であったポーランド友好訪問団を組織してポーランドを訪れることを是非とも早急に実現したいと考え、その具体化を図るため準備委員を選びました。運営委員の長谷川洋行さんと大竹貞さんです。その後、種々検討の結果、急のことですが、もし準備が間に合えば、今年九月の始めにポーランド訪問を実現したいと現在準備中です。先方のポーランド日本協会などに都合を問い合わせたりしているところで、まだ旅行について確定的なことを紹介できるまでには至っていませんが、旅行参加のご希望やその中味に対するご意見・ご質問などを大竹委員(611-2033)の方へお寄せください。

三、第十五期のポーランド語講習会が一月十九日から開かれることが承認されました。その報告が遅れているうちに十回の講習が完了してしまいました。次期の講習会は五月十一日から始まる予定です。詳細は世話人の灰谷運営委員(702-4939)さんまでご連絡ください。

今村先生の

お祝いの会

この運営委員会終了後、同じ場所で「今村先生が学士院会員になられたお祝いの会」が開催されました。昨年末に会長の今村成和先生が、先生のご専門(法学)における業績により、日本学士院会員なられました。ボ文協の会長がこのような名譽ある会員になられたことは、われわれ会員にとつてもたいへん嬉しいことで、少々遅れてしまいました。運営委員会の機会に合わせてお祝いの会を開催しました。時間がなかったので全会員に広くお誘いをする余裕がなかったのは残念でしたが、委員以外の方の出席もいただき、ささやかですが和やかな会を開催することができました。(以上、事務局長吉田宏記、ご連絡は電話788-8226まで)



ポーランド年始・年末 旅の印象記

吉田 邦子

晴れ渡った夜空に次々と打ち上げられる花火。あちらこちらで瞬くカメラのフラッシュ。人々の大きな歓声とシャンペングラスの音が重なる。私は市内中心にあるレストランの窓から広場を眺めていた。一九九四年の暮開けである。

昨年の暮れから主人の故郷であるポーランドを訪れていた私は、この日を歴史と文化の中心、クラクフで迎えた。ポーランドの大晦日はとても賑やかであると以前から聞いていた。こちらでは、暮れになると街の中や新聞で、趣向をこらした大晦日のパーティーの案内広告を目にする。人々は皆着飾って出掛けて行き、親しい友人仲間と楽しく過ごすらしい。除夜の鐘を聞きながら過ぎ行く年を想う日本の静かな年越しとはかなり雰囲気違ってている。

私達が訪れたのは、ある古いレストラン主催のパーティーで、ここでは一部屋をダンス用にセッティングし、飾り付けも手作り風だった。パーティーの始まる午後9時頃には、

八〇名ほどの正装をしたカップルが集まり、和やかに談笑していた。この華やかな雰囲気、ここだけが別世界のような印象である。前菜が終わる頃からダンス会場では音楽が始まり、皆思い思いのステップで楽しそうに踊っていた。時の経過と共にワイン、ウイスキー、ウォッカの量が増えてくる。ステップもより軽やかにになり、パートナーも替わっていく。料理は時間をかけてサービされ、いよいよ〇時近くになると、シヤンペンが注がれて秒読み開始。三、二、一、一、一、ライトが消えた瞬間、グラスのぶつかりあう音が響く。外では花火の音。狭い螺旋階段を昇って上の部屋に行くと、そこから広場が見渡せた。何万人もの人々が集まり、歌ったり踊ったりと大変な騒ぎだったが、混乱した様子はない。後で聞いたところによると、一九九二年には相当な怪我人が出たため、この日は二〇〇〇人の警官を配備していたそうだ。この広場には、クラクフがヨーロッパの都として栄えた

当時、絹の取り引きのために東方から商人たちがやってきたということ、八〇〇年後の今、同じ場所の人々が歓声を上げて、新年を祝っている光景にクラクフの辿った歴史を想い、それを眺めている自分の姿に不思議な感動を覚えた。

さて、パーティーが夜中まで続くことは予想していたものの、三時になっても四時になっても、食べて飲んでダンスをするペースは崩れそうにない。デザートとコーヒーが出てしばらくすると、いくつかのカップルが席を立ち始めた。そろそろ終わりののだろうかと思った。ところがまもなく、テーブルにはパンとハム、チーズなどが盛られたお皿が配られておまけにバルシチスープも運ばれてきた。パーティーはまだまだ続いたのであった。皆元気で、ダンスを挟みながら食べたり飲んだりおしゃべりをしたりと楽しく過ごしていた。私達がようやくホテルへと向かったのは、もうすっかり明るくなってからであった。今年は私にとって、とて

も印象深い暮開けとなった。

この一週間前には、大晦日の賑やかな雰囲気とは対照的であるが、やはり心に残るクリスマス、ワルシヤワの北東二〇〇kmほどにあるピヤリストクで、主人の母、伯母、従兄弟達と共に祝っていた。「伝統的なポーランドのクリスマスは、家族が集まって静かに祝い、食卓には手作りの一二種類の魚料理が並び、プレゼントが交換されて、暖かい家庭的な雰囲気がいっぱいである、そして午前〇時になると教会へ行く」と聞いていた通り、食卓に並んだ魚料理は、ゼリー寄せ、酢づけ、揚げ物、煮物、和え物とバラエティーに富みどれもが伝統的で、日本のお節やお雑煮のようにそれぞれにわが家の味があるようだ。再会を喜び合い、近況を話しながらのとても落ち着いた静かな夕べであった。ミサは〇時から二時間近く行われ、本当に大勢の人々が参加していた。

この時期、街のあちらこちらで何処からともなく聞こえてくるのがポーランドのクリスマススの歌である数々のコレンディ。詩とメロディーは素朴で美しく、心に染みる。私が初めて経験したポーランドのクリスマスは、派手さは無いが濃厚で伝統の深さを感じる、しつとりとしたクリスマスであった。(ポ文教会員)

ポーランド訪問団 計画まとまる

別記のような運営委員会決定に従って訪問団の可能性を訊ねたところ、ウッチのモロ先生（第四回例会）吉田勝一氏（在ポ日本語講師）から歓迎の返事があった。先方の都合や旅行業者の助言をふまえて、北海道ポーランド文化協会のポーランド友好訪問を次のように計画している。

九月四日（日）札幌発、五日成田発、六日ワルシャワ着、七日ワルシャワ着直ちにウッチへ行き約二泊してポ日協会と交歓、その後古都クラコフや首都ワルシャワなどをまわる。その間にアウシュヴィツツやシヨパン生地などの訪問が可能となろう。十四日にワルシャワを出発して十五日（木）に成田経由で札幌帰着。ポーランド内の旅程の詳細は、参加者の希望やポーランド側からの助言に従って決められる。参加費は航空賃とポーランド内の交通宿泊費を合わせて三十万円程度となる。

いま急がれることは、航空便や宿泊の予約のための参加者の確定で、できるだけ多くのポ文協会員および関係者の参加が期待される。関心をお持ちの方は担当運営委員大竹貞さん（電話六一一〇三三）まで至急ご連絡ください。



やさしいポーランド語会話

3

Dziękuję! - Proszę!

Dziękuję!	[ヂ'ィンクワイ'ィン] ありがとう!
Proszę!	[フ'ロ'シ'ィン] どういたしまして!
Proszę!	[フ'ロ'シ'ィン] どうぞ!
Dziękuję!	[ヂ'ィンクワイ'ィン] ありがとう!

bardzo 「たいへん」、uprzejmie 「丁寧に、心から」、serdecznie 「心から」をつけると感謝の気持ちを強調したり、より丁寧にすることができます。

Proszę, Proszę bardzo は人に物を渡すときの「どうぞ」、人から許可を求められたときの返事の「どうぞ」にも用います。

<例>

Dziękuję bardzo (uprzejmie, serdecznie).
[ヂ'ィンクワイ'ィン バ'ルツ'オ (ウ'プ'シ'ィミ'ィエ, セ'ル'デ'チ'ニ'ィエ)]

どうもありがとうございます。

Dziękuję za wszystko. [ヂ'ィンクワイ'ィン ザ' フ'シ'ィイ'ストク]
いろいろありがとう。

クラクフ「日本美術センター」

建設募金のお願い

国田祐作

「灰とダイヤモンド」や「鉄の男」などの作品で私たちになじみ深い、ポーランドの映画監督アンジェイ・ワイダが京都賞（京セラ稲盛財団）を受賞したのは一九八七年、もう七年前になります。このとき彼はこの賞金をクラクフに建設する「日本美術センター」の基金にあてると発表しました。

この構想のもとになったのは彼の青年時代の体験でした。一九四四年ドイツ占領下のクラクフで当時十九歳の彼に異常な衝撃を与えたのは、その時開かれていた日本の浮世絵展でした。「それは人生で最初の、本物の芸術の出会いだった」と彼は述べています。後年、それが同国人の収集家ヤシエンスキがクラクフに寄贈したものであることを知り、国立クラクフ美術館に収蔵されているこれらの作品に独立した新しい場所を与えたい、というのが彼の念願だったのです（ヤシエンスキ・コレクションの一部は先年札幌でも公開されたのでご記憶の方も多いでしょう）。

去年の夏、クラクフを訪れた際、建築現場に行ってみました。ヴィスワ川をはさんで、ヴァヴェル古城と向かい合う川岸がそこです。設計を委された日本の建築家磯崎新はこの景観を生かすように、川のうねりを思わせるゆるやかな曲線を基本にした建築を構想しています。



■ヤシエンスキの住居のあった建物



■ヤシエンスキ

計画では今年の十二月完成の予定ですが、インフレの進行、資材の値上がり、加えて税金の重荷などでオープンするまでにはなかなかというのが実情のようです。クラクフの募金委員会の呼びかけで、日本でも募金活動が行われていますが、目標額五億円に達したということ、急に下火になってしまったのが気がかりです。まだまだ募金中なのです。

私も個人的に何かできることはないかと考えていましたが、幸い、友人のピアノニスト（京都市立芸大ピアノ科教授）田隅靖子さんの賛同を得て、八月末に建設基金のためのピアノ・リサイタルを開くことにしました。シマノフスカ、シヨパン、ルトスワフスキなどの作品を並べたハポーランド・ピアノ曲の夕べにみなさまをお誘いしたいと考えております。収益のすべてを募金にあてることにしておりますが、会員のみなさまのご協力、ご賛同を心からお願いする次第です。



「ポーレ」編集委員会

斎田道子・清水保子

吉田 宏

〔連絡先〕 621-1738（斎田）

POLE 第 25 号(1994.5.7) 目次

運営委員会・今村先生が学士院会員になられたお祝いの会(1994.1.30) 報告	1
吉田邦子「ポーランド年末・年始～旅の印象記」	2
急報・ポーランド訪問団計画まとまる、やさしいポーランド語会話	3
國田祐作「クラクフ・日本美術センター建設募金のお願い」	4